

第4章

参考資料

第4章の資料は、自閉症の障害特性についての解説とこれまで東京都教育委員会が作成した自閉症教育の指導資料から抜粋し一部を修正したものです。

- ◇ 自閉症の障害特性
- ◇ 自閉症の教育の改善（1）「今日からできる」
「自閉症の児童・生徒のための教育課程の編成について」（平成18年3月）より
- ◇ 自閉症の児童・生徒の理解と基本的な対応
「自閉症の障害特性に応じた指導の充実」（平成18年8月 東京都教育委員会）より
- ◇ 自閉症の障害特性に応じた教育のガイドライン
「平成18年度知的障害養護学校における自閉症の児童・生徒の教育課程の研究・開発報告書」（平成19年3月）より
- ◇ 社会性の学習の指導内容
「平成18年度知的障害養護学校における自閉症の児童・生徒の教育課程の研究・開発報告書」（平成19年3月）より
- ◇ 児童・生徒に分かりやすい構造化のアイデア
「自閉症の児童・生徒で編成した学級での指導の充実 ～学習環境～」(平成21年3月)より
- ◇ 小学部の自閉症学級における教室環境の整備
「自閉症学級のための学習環境の構造化について」（平成22年3月）より
- ◇ これまで作成・配布した自閉症教育推進の関係資料

自閉症の障害特性

1 自閉症とは

自閉症とは、「就学指導資料」（平成14年 文部科学省）によると、以下のように説明されています。

自閉症は、以下の特徴によって規定され、医学でいう広汎性発達障害に含まれる障害である。

- ・人への反応やかかわりの乏しさなど、社会的関係の形成に特有の困難さが見られる。
- ・言葉の発達に遅れや問題がある。
- ・興味や関心が狭く、特定のものにこだわる。
- ・以上の諸特徴が、遅くとも3歳までに現れる。

これらの特徴は、軽い程度から極めて重い程度まで見られ、一人一人の状態像は多様である。また、4～6歳頃に多動性が見られることもあるが、適切な教育や経験によって、多動性を含み、諸特徴が目立たなくなることが多い。また、自閉症は、その70%程度が知的障害を併せ有するとされており、知的機能の発達の遅れがない場合は、一般に高機能自閉症と呼ばれている。

医学的には、自閉症は、現在の状態に加えて、乳幼児期の状態を踏まえて診断される。自閉症に類似するアスペルガー症候群（知的機能及び言語発達の遅れや問題が目立たず、発見されにくい）の診断には、特に乳幼児期の状態の把握が必要とされている。なお、自閉という文字が呼称に使われていることから、人を避けて自分の殻に閉じこもるというイメージをもたれやすく、極端な引っ込み思案や人間嫌いなどと混同されがちである。しかし、引っ込み思案などは、他人の存在や思いを強く意識しており、対人関係の不適切な状態であり、自閉症ではないことに留意する必要がある。

2 自閉症の三つの行動特徴について

一般的に、自閉症の児童・生徒は、次の三つの障害を示します。それを「自閉症の三つ組みの障害」とも呼ばれています。米国精神医学会のDSM-IVによれば、三つの障害を三つの領域の行動特徴として次のように説明しています。

(1) 対人的相互反応における質的な障害

- ア 目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調整する多彩な非言語性行動の顕著な障害
- イ 発達の水準に相応した仲間関係をつくることの失敗
- ウ 楽しみ、興味、成し遂げたものを他人と共有することを自発的に求めることの欠如
- エ 対人的又は情緒的相互性の欠如

例：視線が合いにくい、人との情緒的交流が乏しい、人の表情や雰囲気を読み取りが困難で、場に適した行動をとることが難しいなど

(2) 意志伝達の質的な障害

- ア 話し言葉の発達の遅れ又は完全な欠如
- イ 十分会話のある者では、他人と会話を開始し継続する能力の著しい障害
- ウ 常同的で反復的な言語の使用又は独特の言語
- エ 発達水準に相応した、変化に富んだ自発的なごっこ遊びや社会性をもった物まね遊びの欠如

例：言語の遅れ、即時反響言語（エコラリア／おうむ返し）、遅延性の反響言語、言葉の字義通りの理解、身振りやジェスチャーなどの理解と使用の困難さなど

(3) 行動、興味および活動の限定され、反復的で常同的な様式

ア 強度又は対象において異常なほど、常同的で限定された型の、一つ又はいくつかの興味だけに熱中すること

イ 特定の、機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである。

ウ 常同的で反復的な^{げんき}衝動的運動

エ 物体の一部の持続的に熱中する。

例：ひも振り、布の感触、水、光等の感覚刺激や図形・記号への特異な関心、同じ服装にこだわるなど同一性保持への過度な要求、予定の変更による混乱など

3 感覚過敏等の随伴する行動

自閉症の児童・生徒には前述の基本的な障害の他に、次のような特徴があります。これらの特徴は、一人一人の児童・生徒によって、大きな幅があることに注意が必要です。

(1) 感覚知覚の問題

自閉症の児童・生徒の顕著な特性として、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの過敏や鈍感など感覚異常があります。この感覚知覚の問題が、恐怖や偏食の原因になっている可能性もあります。学校では、気温や湿度の状態により学習に集中できないことがある、特定の感覚に固執する、警戒心が強く取り組める課題の種類が広がらないなどの状態を示すことがあります。この感覚知覚の問題への対応としては、耐性を付けることだけの指導は避け、障害特性への配慮と耐性を育てることのバランスが必要です。児童・生徒に指導する場面では、無理に視線を合わせない、正面に立たない、声の大きさを調整する、体に触れるときは声をかけるなどの配慮が大切です。これらの配慮の下で行動が安定してきたら、少しずつ耐性や柔軟性を育てるための指導を計画的に実施していきます。

(2) シングルフォーカスの問題（特異な認知特性）

特定の刺激や細かい部分に注目し過ぎ、他の刺激に注意が向きにくいなど複数の感覚を同時に処理することに困難があります。この状態をシングルフォーカスといい、二つ以上の情報を同時に処理することが困難な状態です。

同時に多数の指示を出すことは避け、どの情報を理解しているかを本人の様子から確認して、一つずつ順序だてて情報を提示するようにしていきます。

4 知的障害との違い

知的障害は、「発達期に起こり、知的機能の発達の明らかな遅れがあり、適応行動の困難性を伴う状態」を言います。この知的機能の発達に明らかな遅れがあり、適応行動の困難性を伴う状態とは、全体的な発達の遅れとして現れます。

自閉症は、前述の三つの障害を示す障害であり、知的障害の有無は関係ありません。

つまり、知的障害と自閉症は全く異なる障害です。

知的障害特別支援学校でこれまで培ってきた実践は、知的発達の全体的な遅れに対応し、各教科等を合わせた指導としての「遊びの指導」「生活単元学習」などがあります。これは、児童・生徒が主体的に生活に即した学習活動を経験することをねらいとしています。

自閉症の児童・生徒が、これまでの知的障害教育で有効であった主体的な経験を繰り返す活動は、曖昧な状況で授業に参加することになり、自閉症の障害特性から多くの困難さが生じます。

しかし、知的障害特別支援学校には、知的障害と自閉症を併せ有する児童・生徒が多く在籍しています。知的障害特別支援学校に在籍する児童・生徒は、自閉症を伴う知的障害ではなく、知的障害を伴う自閉症として対応すべきです。